

# チェチェン戦争と子どもたち

この文章は、日本大学国際関係学部 安元隆子ゼミナール 「富桜祭」企画  
チェチェンの子どもたち救援のためのチャリティ企画 2008年11月3日のために  
準備したものを2009年6月16日に若干の手直しをしたものです。

岡田 一男

(映像作家・チェチェンの子どもたち日本委員会共同代表)



今しがた、みなさんは、1961年、チェチェンに生まれた女性映像作家、  
ザーラ・イマーエワの作品「子どもの物語にあらず」をご覧になりました。こ  
の作品は、1999年秋に始まった第2次チェチェン戦争のとき、戦場となっ  
た北コーカサスのチェチェンから難民となって国外に脱出し、南コーカサ  
スのアゼルバイジャンに辿り着いた子どもたちの証言を記録した2001年の  
作品です。この映画の舞台となったチェチェンと、その子どもの問題についてお話しさせていただくチャンスをくださった  
主催者のみなさん、まことにありがとうございます。

この作品と引き続き作者が息子さんのティムール君とつくった「春になっ  
たら」というアニメ作品は、ストリーミング配信もされていますので、興味のある方は、「科学映像館」というウェブサイトを覗いてみてください。これらの映画についてご質問があれば、私の話が終わった後の質疑のパートで話し合  
いたいと思います。



日本で江戸時代が始まったころから、4世紀にわたり、戦乱に明け暮れ、ほぼ50年に  
一度、人口の1/3から半分が、殺されたり、死んできた、それでも、ついに、これまで滅び  
去ることがなかった民族があります。日本におけるチェチェン報道の草分けである林克  
明さんの写真集の題名が「チェチェン 屈せざる人びと」となっているのは、この史実によ  
っています。また、そこに暮らすチェチェン人とはどんな  
人びとかを、チェチェン人自身が書いた本が、日本語訳さ

られています。ハッサン・バイエフさんという形成外科医が書いた本です。彼自身の波瀾万  
丈の半生が記されています。彼は、11月11日から19日まで日本にやってきます。12日  
夕刻には、東京都文京区で講演会があります。彼は、アメリカのボストンに住んでいま  
すが、そこから故郷のチェチェンに往復して、戦争に傷ついた同胞の治療に当たっていま  
す。その活動を有効に進めるため、チェチェンの子どもたち国際委員会 (ICCC) を米国で組織しています。



私たちが日本でそれに協力する活動を進めています。

黒海とカスピ海の間のコカサス地方、万年雪をいただく風光明媚な山やま、深い森と清流、そして肥沃な大地と豊かな石油資源に恵まれた土地に暮らすチェチェン人は、既に 420 年間、南下してきたロシアの植



民地支配に烈しい抵抗を繰り返してきました。19 世紀には数十年に及ぶコカサス全域を巻き込んだカフカス大戦争があり、大量の死者とトルコへの追放者をだしました。北コカサスに暮らす先住諸民族の総和より、遙かに多くの北コカサス出身者が、実はトルコのアナトリア半島に暮らしているということは、余り知られていません。また、冬季オリンピックの開催地に決まった南ロシア屈指の黒海沿岸保養地ソチは、コカサスと言っても、そこに暮らすコカサス民族はいませんが、これは有史以来ずっといなかったのではなく、18-19 世紀のロシアのコカサス侵略の結果、この地域にくらしていた幾つかの民族が、絶滅してしまったのです。

チェチェン人も 20 世紀には、1944 年の民族丸ごと強制移住で、人口の 1/3 (半分以上という主張もある) を失いました。さらに二度にわたるチェチェン紛争は 1994 年に始まり、97-99 年の短い停戦期間を挟んで、今も小規模な戦闘が続いていますが、この軍事衝突で、およそ人口 100 万と言われたチェチェン人は、実にその 1/4、およそ 25 万人の非武装民間人が戦火の犠牲になりました。その中には、4 万人の子どもが含まれます。



今年 10 月中旬、私はチェチェン共和国を訪問し、復興の進む首都グロズヌイと近隣の村で数日を過ごし、現在のチェチェン政府の文化、保健担当者などと語り合う機会を持ちました。その印象を一口で語れば、きわめてテンポの早い、驚異的とも言える復興は見られるものの、人びとに与えた戦争の傷跡は、あまりにも深く、産業インフラは破壊されたまま、将来への課題は、まだまだ非常に多いということです。チェチェンの人口は

100 万と言われていましたが、25 万人が戦争の犠牲となり、30 万人が難民となりました。近代の戦争の恐ろしいのは、平気で非武装の民間人、一般市民を巻き込み、彼らを殺すことで相手の戦意挫こうとするところです。チェチェン戦争で



は、子どもを傷つける目的で開発された、「玩具型地雷」といったものも使われました。大規模な戦闘がなくなって、難民は、かなりの数がチェチェン国内に戻っており、出産率も非常に高いので、現在の人口は 60 万くらいと思われていますが、ロシア側の行った国勢調査では既に 100 万を超えています。ソ連時代から問題視されてきましたが、ソ連、ロシアの国勢調査の統計には、政治的な思惑の介入が濃厚なのです。人口統計を元に、人口数に応じて連邦予算が配分されるので、人口数が多いことは、その地域の予算獲得に有利に働きます。一方、国外に出た難民は、一時的には周辺の国々、たとえ

ば西隣のイングーシ、南コーカサスのグルジアやアゼルバイジャンに多かったのですが、かなり人びとが国連の難民高等弁務官事務所の世話で、ヨーロッパ諸国やカナダなどへ移りました。その数はおよそ 10 万人といわれています。旧ソ連で現在、実質的な難民がいるのは、アゼルバイジャンとカザフスタンでしょう。両国とも国としては難民と彼らを認めず、友好国であるロシアの国民が、自分たちの都合で、一時的に滞在していると言う形を取っているため、難民としての国際水準の保護を受けられない、という困難があります。

チェチェン人とは 典型的なコーカサス人種(コーカソイド=白人)で、彼らの言葉は、古代ヨーロッパ言語であるナフ語属の言葉です。ロシア人が話すスラブ語系のロシア語とは、全く異なります。しかし、チェチェン語が通じる範囲は、ごく限られていますので、殆どの人びとがロシア語を自由に話します。古い民族がしばしば、自らを人とか、人間と名乗るように、例えば「アイヌ」も人間という意味ですね。ナフというのも人間という意味で、ユーラシアに広く分布し、コーカサス地域の古代から伝承される、洪水伝説の中に、墮落した人間社会の中で、あくまでも神に忠実な僕(しもべ)として、神が怒って、全てをリジェクトしてしまおうと決意したとき、箱船を作って生き残った、「ノアの箱船」の伝説は、キリスト教の聖書に出てくる話として、聞かれた方もいられるかと思います。ノア、ノイ、ヌフ、ナフ・・・これらは、いずれも同じ語源の言葉で、ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教という起源を一つにする一神教が共有する伝説の人物であり、チェチェン人は、自らをノーフチョすなわち、「ノアの人びと」、「ノアの子どもたち」と呼んでいます。



イスラームをチェチェン人が受容したのは、16世紀末と、比較的後の時代ですが、それ以前のことは、あまり良くは判っていません。現代のチェチェン人が信じる宗教は、イスラームです。チェチェン人が信仰してきた伝統的なイスラームは、現在のトルコがあるアナトリア半島から中央アジアにかけての、トルコ語系の言語を話す民族、チュルクと言われる人びとの居住域に広く分布するスーフイーと呼ばれる神秘主義です。ですから近代のサウジアラビアなど、アラブ諸国のイスラームとも、ちょっと肌合いが違ってきます。ですからチェチェン人の日常生活を律する規範は、コーランに記されたイスラーム法(シャリーア)と、古代からのコーカサスにおける口承の不文律である伝統慣習法(アダート)のふた

つがあります。シャリーアとアダートの間には矛盾するところもあり、どちらに重きを置くべきかは、チェチェン人の間でも、論議の別れるところですよ。

古代の成文法であるハンムラビ法典も、アダートと多くの共通が認められます。有名な、「目には目を、歯には歯を」という言葉は、皆さんもご存知でしょう。チェチェンのイメージを「おどろおどろしいもの」にしている言葉に、「血讐」すなわち「血の復讐」があります。一族の成員を殺された者は、一族による血の復讐を宣言する事が可能です。その場合、一族の成人男子、全員が連帯して、殺人者あるいは、その一族の誰かの命を奪うまで復讐を続けることになります。男性が殺された場合、殺した相手方も、命を一つ差し出さなくては片がつきません。女性が殺されるようなことがあれば、相手方に要求されるのは、命二つです。まあ、日本も江戸時代までは、これ似た「仇討ち」があったわけで、いろいろな細かい決まりごとが、そこにはありました。チェチェンでも、色いろな決まりごとがあり、相手を許したり、殺し合いを回避して、双方を納得させる様々な仕組みもあるようです。ですから、特に変わったことではありません。明治時代になって、仇討ちは法律で禁じられましたが、時代劇の中では仇討ちは、非常に人気のあるテーマですし、「忠臣蔵」など、いくつ映画やテレビで製作されてきたことでしょうか？

チェチェン人は、彼らの行動規範であるアダートが、正常に機能していれば、この血讐も社会を安定して維持する重要な役割果たすと言います。それは、アダートが、血族間の厳しい連帯責任を課しているからです。血族は、7代にわたって、とりわけその成人男子は、一族の名誉も、恥も、全て共有しなくてはならないのです。ですから、誰かが不始末をすれば、その代価を子孫たちが長い間払い続けねばならないのです。ですから、一般的にチェチェン人は非常に慎重深く、行動に慎重です。「ソボル」すなわち抑制とか、忍耐と言う言葉が、一人前の人間の持つべき重要な心構えとして子どもの時代から教え込まれます。チェチェン人の行動原理を単純明快な言葉で表すとしたら、「一人は全ての人のために、全ての人は一人のために」という言葉ではないでしょうか？この言葉は、他の世界、たとえばロシア革命の中でも共産主義者たちによって良く使われました。エイゼンシュテイン監督の有名な映画、「戦艦ポチョムキン」の中でも殺された水兵の遺骸に弔問に訪れるオデッサの市民の光景に、この言葉が字幕で登場します。しかし、残念ながらロシア社会では、このスローガンは、人びとの行動を支配する基本原理とは、なりえませんでした。というのもロシア社会がいわば無責任社会であって、誰も他人の行為に連帯責任を負うことのない社会だからです。旧ソ連では、スターリン主義



によって非常に沢山の犠牲者が出ました。それは、人類に対する犯罪とでも言えるものです。しかし、その責任追及は常にあいまいにされてきました。ロシアとチェチェンの対立の根底には、このような大きな精神的背景があることを記憶しておいていただきたいと思います。

そのチェチェン人たちの血族集団の団結の中で、過去の叡智を伝承している老人、長老たちは格別敬われ、未来の繁栄を担うで

あろう子どもたちは、非常に大切にされます。

また男の子と女の子の役割分担が明確に別れてもいます。男の子の間では格闘技が非常に愛好されていて、レスリングやボクシングだけでなく、日本の柔道や空手も大人気です。衛星放送で見られますから、みんな K-1 やプライドのことなども実によく知れわたっています。私が滞在したアルハン・カラという村は、首都グロズヌイの南の郊外に隣接する1万5千人が暮らす大きな村でしたが、プロ級の柔道家が、この村だけで10数名いるということでした。北京オリンピックのロシア選手団の中で、格闘技種目には、チェチェン人の選手が沢山いました。今回のイベントの組織されたみなさんが、柔道着の提供を呼びかけてくださっていますが、こうした村の柔道クラブを青少年のために復活させようという動きに呼応してくださっているわけです。



現在、子どもの問題で大きな課題となっているのは、子どもの健康の問題です。戦争は、彼らに何をもちたか？多くの子どもたちが戦争の直接の犠牲になって死にました。死ななくても、大怪我をしたりして身障者となった子どもが沢山います。砲爆撃の轟音で聴覚障害を患ってしまった子どもたち、目を傷めてしまった子どもたちも少なくありません。さらに親が死んでしまって孤児となった子どもたちも沢山います。戦争後の生活環境の悪さから、結核を患ったりする子どもたちも少なくないのです。若者の間では、エイズの蔓延が懸念されています。戦争前、グロズヌイは、南ロシアの中心都市、ロストフ・ナ・ドヌーに次いで大きな工業都市でもありました。首都、グロズヌイの周辺には、沢山の石油関連企業の工場がありました。第二次チェチェン戦争で、これらの工場は法爆撃にさらされ、燃えあがり、壊滅する中で、有毒な化学物質がたくさん大気中にばら撒かれ、人びとの健康を破壊しただけでなく、大地に吸い込まれて生態系を著しく破壊しました。その結果、ガン患者も増えたと言われています。原因不明な様々な疾患が報告されています。深刻なのは、現在、チェチェンでは、非常に高い出生率でまさにベビーブームなのですが、様々な先天性障害が多発しています。その一つが、口唇口蓋裂、俗に言う「みつち」などの症状です。日本でも新生児400人から500人は見られると言う症状ですが、この症状に悩む子が、今年9月の国際医療慈善団体、オペレーション・スマイルのミッションでは400人に治療の助言を行いました。おそらく、潜在的な患者を予想すると、1000人近くいるのではないかと専門家は予想しています。多分日本の数倍の出現率なのではないでしょうか？戦争前には、口腔外科や形成外科の専門家すらチェチェンでは口唇口蓋裂の患者を見たことがなかったと言います。人体発生生物学の専門書などをみると、この症状は、主にお母さん



場がありました。第二次チェチェン戦争で、これらの工場は法爆撃にさらされ、燃えあがり、壊滅する中で、有毒な化学物質がたくさん大気中にばら撒かれ、人びとの健康を破壊しただけでなく、大地に吸い込まれて生態系を著しく破壊しました。その結果、ガン患者も増えたと言われています。原因不明な様々な疾患が報告されています。深刻なのは、現在、チェチェンでは、非常に高い出生率でまさにベビーブームなのですが、様々な先天性障害が多発しています。その一つが、口唇口蓋裂、俗に言う「みつち」などの症状です。日本でも新生児400人から500人は見られると言う症状ですが、この症状に悩む子が、今年9月の国際医療慈善団体、オペレーション・スマイルのミッションでは400人に治療の助言を行いました。おそらく、潜在的な患者を予想すると、1000人近くいるのではないかと専門家は予想しています。多分日本の数倍の出現率なのではないでしょうか？戦争前には、口腔外科や形成外科の専門家すらチェチェンでは口唇口蓋裂の患者を見たことがなかったと言います。人体発生生物学の専門書などをみると、この症状は、主にお母さん

率でまさにベビーブームなのですが、様々な先天性障害が多発しています。その一つが、口唇口蓋裂、俗に言う「みつち」などの症状です。日本でも新生児400人から500人は見られると言う症状ですが、この症状に悩む子が、今年9月の国際医療慈善団体、オペレーション・スマイルのミッションでは400人に治療の助言を行いました。おそらく、潜在的な患者を予想すると、1000人近くいるのではないかと専門家は予想しています。多分日本の数倍の出現率なのではないでしょうか？戦争前には、口腔外科や形成外科の専門家すらチェチェンでは口唇口蓋裂の患者を見たことがなかったと言います。人体発生生物学の専門書などをみると、この症状は、主にお母さん



が、喫煙、飲酒、シンナー遊びなどをすると、誘発されやすいと記しています。しかし、チェチェンの女性は、およそこういうことと無縁です。チェチェン人は平原部に暮らしていて、ロシア人とも付き合う男性たちには、酒を飲む人たちもいますが、まず深酒はしません。女性の場合、飲酒・喫煙はありません。にもかかわらず、戦争を機に多発している。まだ因果関係は解明されていませんが、戦争の結果と考えてまず間違いなさそうです。ダウン症の子どもの発症率も上がっているといわれています。



また子どもたちに暗い影を落としているのが、学校の不足と、教育インフラの不足です。教育の専門家である先生たちも不足しています。さきほど孤児が多いと言いましたが、チェチェンは血族の団結が固いので、多くは親戚の誰かが引き取って育てます。しかし、ここでも問題が起こるのが教育の問題です。子どもたちは成長していきますが、それに対応する教育が充分ではありません。とりわけ、障害児

たちの教育施設は決定的に不足しています。ですから、学校に行きたくても行けない子どもたちがかなりいるということです。より年上の青少年の問題では、戦争と混乱が十数年続いて、教育をまともに受けていない世代が、ひと世代丸ごと生まれたという深刻な事態があります。そうした青年たちをどうするのか？ 青年たちの不満を吸収できなければ、青年たちが未来への展望を持つことができなければ、明るい未来はありません。現在のチェチェンにとって教育と文化の普及強化が、必須の課題なのです。そして、もう一つ、高い失業率の解消も大きな課題です。産業の大規模な再生による労働力の吸収がなければ解決はありません。



さらに、社会の安定を考えると、大きな問題になってくるのが、チェチェンだけでなくロシア全体でも、そうなのですが「平和構築」あるいは、「人間の安全保障」と言った概念が普及していないことです。ロシアにも、いろいろな人権擁護団体がありますし、献身的な活動家もいるのですが、一般的に人権感覚が市民社会の中で発達していないので

す。政権自体が、非常に強権的で、政権運営にも、相手に対話ではなく、力でねじ伏せるやり方がとられてきました。その中で、ロシアは西欧諸国に調子を合わせて、死刑がモラトリアムで、執行されなくなっているのですが、裁判抜きで処刑といった無法が横行しています。権力者の不正を取り上げた数多くのジャーナリストが、しばしば殺されているのが、ロシアです。それは旧ソ連時代のきめの細かさが無くなった、非常に短絡的な特務機関の行動パターンでいわばプーチン時代の特色ともいえます。

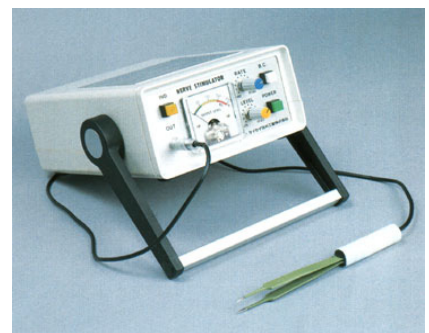
チェチェン政権の変貌：果たしてカディロフ政権は、ロシアの傀儡政権なのか？この問題は非常に微妙です。というのは、出発においてカディロフ政権が傀儡政権であったのは間違いが無いからです。ロシアは、1997年に、合法的に民主的な選挙を通じて誕生したチェチェンのマスハドフ政権を2年後、武力で首都から追い出し、傀儡行政府を樹立し、形式的には、国勢調査、憲法制定国民



投票、大統領選挙などを行いました。国際的な常識を逸脱した非民主的なものでした。独立派とのつながりを疑われた住民は、容赦なく弾圧され、地下に潜った独立派の指導者は、次々と殺害されました。西側諸国のみならずロシアの人権団体は、人権状況に懸念を訴え続けて今日に至っています。しかし最近の数年間、状況が変わってきています。一つは、独立派の武装勢力が、チェチェン国内での大規模戦闘を避けるようになった。民間人を標的とする、いわゆるテロ事件が2005年以降全く起こらなくなった。ひとつには、残存独立派が、周辺国、イングーシ、ダゲスタンなどで戦う様になり、チェチェンは相対的に平穏になった。人権侵害と指摘される事件も皆無ではないにしろ、激減した。政権と人権団体の間にも対話が成立するようになった。また政権幹部の構成を見ても、旧独立派政権の官僚たちの登用が非常に目立ちます。そして、全体的なロシアの好景気に押されて、チェチェンノ再建が軌道に乗ってきた。今回、チェチェン内部に行ってみて痛感したのは、様々なチェチェン人の性格、客好き、派手好き、勤勉、熱中、そういった特徴が、首都でも際立っていて、親ロシア政権とは言っても、チェチェン人主体だと、ロシアとは、こうも違うかということが随所に見られました。このような傾向は、戦後復興が進めば進むほど際立っていくのではとも思えました。

表面的には、しらけるようなロシア賛美のスローガンが、ロシア人にも良くわかるように、街の随所に、ロシア語で掲げられていますが、その裏で、別の流れが動いています。ジャーナリズムの取材となると、色いろな介入が目立ちますが、商業目的のチェチェン訪問や、芸術文化の交流は、殆ど制約がなくなっています。ですからチェチェン国内への支援も十数年ぶりに可能になってきたのです。

それでは、日本はチェチェンに対して何が出来るか？ 本当に良いパートナーを見つけることができれば、お金を提供して有効に活用してもらうことでしょ。たとえば、JCCC-ICCC を通じての医療改善に寄与すると言ったやり方、また物を提供するという方法もあります。これは日本で要らなくなった屑を送ると言うのは絶対に駄目です。現代は情報社会です。最新情報は、インターネットでコーカサスの山奥にも届いています。中古で構わないのですが、質の高いもの、壊れにくいものを送るのでないとまずいです。それと距離が離れているので、輸送コストも考える必要があるし、ロシアの税関と言うのも配慮しなくてはなりません。



我々は春に、あるメーカーが作成した顔を手術するとき顔面の神経を痛めないようにするための神経刺激装置を購入して ICCC に提供しました。今回計画しているのは、低出力半導体レーザー治療器の提供です。1980 年代半ばに開発された物理療法機器で、日本では疼痛緩解すなわち痛みを和らげるものとして認可された機器ですが、チェチェンで使う目的はそういうことではありません。使い方によっては、時間はかかりますが、火傷の跡や、ケロイド、手術の跡など、戦争で傷ついた人びとの、まさに傷跡を治療するのに使おうというのです。新品の定価ベースでは、400 万円のする機器ですが、使用後数年経った中古品を安価に手に入れる方策を探っています。ということで、現在、私たちはお金集めをしています。みなさんの協力をお願いします。



コーカサスから遠い日本ですが、チェチェン人の中にある、日本に対するあこがれ、近親感には、日本人には想像を絶するものがあるのです。アダートの行動規範と、日本の武士道の相似性に、彼らは格別の親近感を抱いていますし、柔道、空手、剣道、格闘技や武道に対する並々ならない関心もあります。これから産業の再生、再建を考えるときには、日本の最新のハイテク技術の導入が図られるでしょう。

話のはじめに私は、日本の江戸時代が始まったころから戦乱に明け暮れたとチェチェンを表現しました。そこで、皆さんは、日本のことを考えてみてください。日本では江戸時代の 300 年間、皆無ではありませんでしたが、大きな戦争がありませんでした。その意味を考えてほしいのです。この間に民衆の教育水準がたかまり、一般庶民も読み書きそろばんができるようになりました。だからこそ、日本はそのあとの明治時代の近代化をスムーズに進めることが容易にできたわけです。鎖国をしていた江戸時代を暗黒の時代だったように考える人もいますが、この時代に日本の独自の文化が熟成されたとも言えます。私は平和と言うことの大切さ、戦争をせず、武力に無駄な金をできるだけ使わない、こうしたことの大切さを訴えていくことも、チェチェンへの支援の中では大切だと考えています。引き続き百年に経験した愚かな戦争と敗戦の焦土の中から、繁栄した国を立て直した日本については、我われが提供できる社会のありようも、ひとつの例として大切であると考えます。女性映像作家、ザーラ・イマーエフは、2003 年に、来日して日本国憲法第9条のコンセプトに強烈な印象を受けました。平和と言うことの大切さを子供たちに教え込むことを、実験的なアートセラピーの活動の中で始めています。私たちは一方的に与えるのではなく、チェチェン人の友人たちから、多くのことを学ばせてもらっているのだと考えています。



話のはじめに私は、日本の江戸時代が始まったころから戦乱に明け暮れたとチェチェンを表現しました。そこで、皆さんは、日本のことを考えてみてください。日本では江戸時代の 300 年間、皆無ではありませんでしたが、大きな戦争がありませんでした。その意味を考えてほしいのです。この間に民衆の教育水準がたかまり、

一般庶民も読み書きそろばんができるようになりました。だからこそ、日本はそのあとの明治時代の近代化をスムーズに進めることが容易にできたわけです。鎖国をしていた江戸時代を暗黒の時代だったように考える人もいますが、この時代に日本の独自の文化が熟成されたとも言えます。私は平和と言うことの大切さ、戦争をせず、武力に無駄な金をできるだけ使わない、こうしたことの大切さを訴えていくことも、チェチェンへの支援の中では大切だと考えています。引き続き百年に経験した愚かな戦争と敗戦の焦土の中から、繁栄した国を立て直した日本については、我われが提供できる社会のありようも、ひとつの例として大切であると考えます。女性映像作家、ザーラ・イマーエフは、2003 年に、来日して日本国憲法第9条のコンセプトに強烈な印象を受けました。平和と言うことの大切さを子供たちに教え込むことを、実験的なアートセラピーの活動の中で始めています。私たちは一方的に与えるのではなく、チェチェン人の友人たちから、多くのことを学ばせてもらっているのだと考えています。